

研修報告書 No. 9

今回の地域医療研修で一か月間、高知県の病院で研修を行いました。地域研修といっても私が研修を行った病院は、比較的大きな地域の中核病院であり、ほとんどの診療科が揃っており、必要な設備も一通り整っていると感じました。

毎朝、全診療科の先生方が医局に集まり、その日の当直や入院患者のことなどを共有しており、診療科間の垣根が低く、相談しやすい環境であることが、大学病院とは違うと感じ、印象的でした。

研修内容は、主に外来診療、救急対応、病棟業務、内科当直、在宅医療でした。

内科外来では、上級医の指導のもとではありますが、まずは私がひとりで患者さんのお話を聞き、診察してから、必要な検査、処方を考え、時には入院決定までを行うこともありました。今までも、外来を見学させていただいたことはありましたが、自分が主体となって行う機会は初めてだったので非常に有意義な経験になりました。診断がほとんどついた状態で紹介されてくる大学病院とは異なり、診断がついておらず病名がわからない状態で、様々な訴えで来院される患者さんを自分ひとりでみなければいけないため、不安も大きかったです。まずは自分なりに診察し、鑑別を考えた上で、方針や対応に悩んだ際には、上級医に相談できる環境が整っていたため、自分の考えを見直し、修正しながら行うことができ、成長できたと思います。外来に来る患者さんは大学病院に比べて軽症な方が多い印象でしたが、中には重症な方もいて、どこまで検査するべきなのか、入院が必要なのかなど判断が難しい場面もあり、外来という限られた時間内で、多くの患者さんを診察することの難しさを感じました。この経験を通して、自分で考える力や自発的に行動する力が身に付き、医師として自分が何かする時は責任が伴うということを改めて自覚する機会となりました。

病棟業務で印象的だったことは、間質性肺炎で呼吸器内科に入院していた患者さんで、膠原病の要素の有無が診断や治療方針、予後の推定に非常に重要であるため、皮疹が出ていないかの確認を皮膚科の先生と一緒にいったことです。診療科間の垣根が低く、気軽に相談しやすい環境であり、患者さんを1つの科がみるのではなく、病院全体で診ていることが印象的でした。

また、高齢者の多い地域であるため、退院後の生活支援も重要であり、患者さんそれぞれに生活があり、何を優先するのかなど、背景や思いはひとりひとり違うことを実感し、多職種スタッフの方と連携しながら、できるだけ患者さんの気持ちに寄り添った医療を提供することも地域医療では大切であると感じました。

ワクチン接種や健康診断の間診も担当したことで、地域の中核病院として、疾患の治療だけでなく、予防医療を通して住民の健康や生活を支えていることがわかりました。長くかかられている患者さんも多く、医療者と患者さんの距離が近いことが印象的であり、地域に密接に関わり、生活を支えている病院であることが見て取れ、地域医療の実際の現場を知る

ことができました。

この地域医療研修を通して、普段の研修では経験できない多くのことを学ぶことができました。研修を支えてくださった高知医療再生機構の皆様、研修を受け入れてくださり、優しく熱心に指導してくださった病院の先生方やスタッフの皆様、研修にご協力いただいた患者さん、全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。高知県の皆様のおかげで、非常に有意義な時間を過ごすことができました。このような貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。